

ばんしゅうさらやしき 播州皿屋敷

〔解説〕

寛保元年（一七四一）七月、大坂豊竹座にて初演。為永太郎兵衛・浅田一鳥らの合作。江戸時代に流布した皿屋敷の怪談に、細川家の御家騒動をからませた時代物。舞台を播州姫路に書き改め、時代も室町幕府八代将軍・足利義政の頃に脚色しています。全編を通じ細川家の重宝である唐絵の皿が重要な役割を担っており、細川家とその宿敵・山名家の対立を背景に皿の争奪戦が展開していきます。聞きどころは皿屋敷伝説ではおなじみの、お菊の幽霊が「一つ二つ…」と皿を数える場面です。

〔青山鉄山館の段 あらすじ〕

（姫路細川家の国家老・青山鉄山は、無二の忠臣を装いながら主家の横領を企んでいます。若殿の巴之助が鎮守の社へ参詣する折に泉水に毒を流し、病死に見せかけて殺す計画を、弟の忠太に明かします。）

腰元お菊は、預かっていた細川家の家宝、唐絵の皿を持って鉄山の下屋敷へやってきたところ、その密計を立ち聞きしてしまいます。企みを知られたことに気づいた鉄山は、十枚揃いの家宝の皿の一枚を懐に隠し、お菊に皿を数えさせます。一枚足りない皿を盗んだと濡れ衣を着せて、鉄山はお菊を切り殺し、庭の井戸に投げ込みますが、お菊は無念のあまり死霊となって現れ、「一つ二つ」と皿を数えて鉄山を悩まします。そこへ駆けつけたお菊の夫・船瀬三平は、お菊の声を聞いて鉄山の企みに気づき、皿を取り戻すと共に鉄山を成敗して、亡き妻の敵を取ったのでした。

青山鉄山館の段

入りにけり。

播磨がた名さへなまめ媚く姫路の城下、五軒屋敷の一構へ

は、御家老青山将監鉄山しょうげんが下館、都がたの珍客とて

等閑ならぬ儲けの亭ちん、築山花鳥泉水の流れ涼しき夏

の景。来かゝるお菊は切り戸の内、皿箱携へ立ち聞

くとも、知らぬ忠太はぞくく勇み

「ハ、アあつぱれ大将聡明叡智、あの泉水へ毒流し

とはコレ究竟くつきょうの御術、善は急げぢや、この隙に」

と、件の器を携へて駆け行く向かふへお菊がずつと

「忠太様待たしやんせ」

「ヤアそなたはあの、お菊ぢやないか、シテシテ今

のを何ぞ」

「ハイ聞いたでもなし聞かぬでもないが、何はとも

あれ、お泉水へそんなものを流さうとは、マ訳もない事さしやんすな」

「コリヤヤイお菊、かうだわやいくこの間の雨続

きに、お泉水が濁りし故若殿のお身には毒ぢやと思

ひ典薬が調合せし水澄ましのの妙薬、水の毒を流せと

云ひしをあぢに聞きなし、気の廻りしは才道理々々」

「コレハマアく本にわたしとした事が、モ何を聞

くやら、聞きはつつて今の様に申したがお氣にさは

らば御赦されて下さんせ」

「ホ、ウ疑ひ晴れて満足々々、忠太は早く望みに任

せ、御皿を拝見致したし、それ手水を」

と氣を付ければ、機転も菊が浅からぬ井筒の元に立

ち寄つて、手元もゆらに汲み上げる、釣瓶を忠太が

取り上げて清めの手水を結ぶ間に、鉄山は帛紗ふくさ開い

て紐解くく、箱の内なる御皿をそつと一枚懐へ隠

し手早く直し置く。お菊は何の気も付かず、後は我が身の敵とも知らぬ心ぞ是非もなき、さあらぬ体ていに「コリヤ〜お菊ソレ大切の御皿なるぞ、念のため数を改めその上で兩人とも拝見せん、早疾とく〜」と鉄山が指図にお菊が恭うやうやしく、包みし帛紗打ち敷きて、蓋押し開き御皿を、帛紗の上に一枚づつ読み並べて

「ハテ面妖な、たつた今御前で箱の錠は夫に代はつてわたしが明ける内の封印は殿様の直じきにお切り遊ばす、その上とくとわたしが読んで受け取つてまゐりしは、恰度ちやうど十枚揃うてあつたが一枚足りぬは、ハテ不思議な」

と箱を捜しつつ辺りを見廻し、立つたり居たりうろろするこそ道理なれ。鉄山わざと驚く面色

「ヤアかほど大切なる御皿を十二足らぬと云つて事

が済まうか、御前へはソレ忠太その方いて吟味せよ、早く行け〜。ヤアおのれ大胆女郎めろろめこゝにない皿が何の御前にあるもので盗んでも盗まいでも足らぬからは、おのれが科とが、但しは又とばついて打ちぬいだが、サア真つ直ぐにぬかしおらう」

「ナウ情けないお疑ひ大切な御皿を何しに私が破わりも盗みも致しませう、これが見えねば私が難儀ばかりじやない、一枚足らいでも殿様や三平殿の身の難儀、モお家の大事になるわいな。この上のお願ひには、どうぞ念晴らしに今一度、改めさして下さりませ、お情けお慈悲」

と手を合はせ、かこち嘆けば

「ヤアごくにも立たぬ世迷ひ言、左程に思はば、ソレ手ばしかく読んで見よ、サア読め」

「アイ一つ二つ三つ四つ五つ」

「コリヤ〜女、五枚はそれでモウ済んだぞ、これから後はモウ五枚性根を据ゑて、早く読みおれ」

「アイ六つ」

「オツト六枚」

「七枚」

「七枚」

「八枚」

「八枚」

「九枚」

「九枚」

「ハア」

「早く読め」

「アイナ、テモ面妖な」

「何が面妖、幾度読んでも同じ事、皿が足らねばう

ぬがそつ首討ち放すに、サ誰が点の打人うちてがある、め

ろ〜ととこぼへずと、念仏申して観念ひろげ」

と刀をずばと抜き放せば

「まあ〜待つて下さんせ、すりやどうあつても殺

さしやんすか」

「くどい〜」

「鉄山様、そりや余り胴慾ぢや〜〜モ死ぬる命

は惜しまねど、失せたる皿の詮議もせず、このまゝ

死んで殿様ばかりか夫の難儀、そればかりが思

はれて、わしや何ぼでも死にとむない、命が惜しい、

コレマ卑怯ではないわいな、どうぞ最も一度あの皿を

読み直さして下さりませ」

「ヤアしつこい願ひ叶はぬ〜未練者め」

と飛びかゝり、取つて引き寄せ弓手ゆんでのあばら

「ア、〜、胴慾ぢや〜鉄山様、このまゝやみやみ

死ぬるとも、魂は我が夫の影身に添うて御皿の詮議

をせいで置かうか、ア、この訳がたつた一言逢うて
云ひたい、マ今日に限つて三平殿は何故に遅いぞ、
この世の名残に今一度、顔が見たい逢ひたいわいな、
暫しの情けに鉄山様、とゞめを待つて下さんせ、ど
うぞ今一度あの皿の数が読みたい〜」
と今際の胸に迫る思ひの数々を、数へ立て〜嘆き
苦しむその有様、目も当てられぬ次第なり。

「ヤア長ぼへひろぐな叶はぬ」

と刃を抜けば血は滝津瀬、よろぼひ廻るを切り伏せ
切り伏せとゞめの刀、この世を早く秋の菊、散りゆ
く身こそはかなけれ。鉄山猶もすまし顔

「末期の水は勝手にくらへ」

かたえ

と傍の井戸へ死骸を打ち込み、血刀引つ提げ泉水の
汀に立ち寄りしづ〜と、血汐を洗ふその処へ、息

急ぎ戻る弟忠太

「ヤアさてはお菊を手にかげられたか」

「オ、サ大切な御皿を失うた科、許して置かれぬ」

「イヤサテモ本人の菊を殺して、マ誰を詮議の手が
かりに」

「フ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、我が年来の望みを遂げ、主
君の家を横領するとも、この皿がなくては叶はぬと
いふ事、汝ごときに習はぬか、毒害の一大事を女め
が聞いた故、落ち度を拵へ殺して仕廻しまふ鉄山が謀はかりごと、
その一枚は身が所持する」

と縁先の手拭取つて押し包み懐中すれば、時に怪し
や梢に風あれ勢動して釣瓶の上へ燃え上がる、いん
うんたる心火しんかの光、井筒の中よりお菊が声、『ナウ申
し鉄山様その皿を今一度どうぞ読ませて下さんせ』
と聞くより忠太は

「ぎやつ」

とばかり

「ナウく怖やこりやたまらぬ赦せく」

もわなゝき声、後をも見ずして逃げてんげり。ありしに変わらぬお菊が姿、かげの如くに現れ出で、

「ナウ恨めしや鉄山様、その皿を今一度読み改めず殺されし恨みは誰に報はうぞや、一つ二つ三つハア悲しや」

と叫ぶ声、障子に響いてびりくく、庭の本草も動揺し、雨はしきりに降りしきる。かゝる折しも船瀬三平武経は、主君のご機嫌窺ひと広袖合羽高足駄忠義に心紅葉傘、横切る風に取りられじと足も息急き歩みくる。向かふに鉄山雨にひらうち

「こりやどうぢやお目でももうたか、コレサ鉄山殿く」

「ヤア三平殿か、マようこそお出で、さてさて俄に

持病がおこつて」

「それは御難儀、拙者も今日は冷光院様の館へ召され、それ故延引致したが、殿の御機嫌は如何でござるな」

「イヤモ気遣ひめさるな、御機嫌ずんとよいが貴殿もさぞお草臥くたびれ、モお出での様子は某それがしがよろしく申し上げん、サアくこれから直ぐにお帰りあれ」

と己が悪事を隠さんため、あせるにかひも風につれ、一つ二つ死霊の数ふる声に連れ、自然と三平心にこたへ

「ハテ心得ぬ、見ればあれにお家の重宝唐絵の皿、数ふる声は正しく女房、声ばかりで形の見えぬは」

「合点がゆくまい、十枚揃うたあの御皿、一枚盗んだ科によつてお菊は某が手にかけたわいヤイ」

「何と、すりやヤゝゝゝ、女房は殺されたか、譬たとへ

お皿が失せたりとて、評定詮議にも及ばず、理不尽に菊を手につけ、左程の事を押し包んで某を去なしたがるは、ムウこりや鉄山その方に詮議があるわい」

「ぬかしたりヤナ、評定もへちまも入らぬ皿が足らねば預かりし汝も科、女めと同罪逃れぬ覚悟ひろげ」と抜きかくる手先をしつかと

「イヤサコレもがき召さるな詮議の掛かつた青山鉄山、骨をひしいでも云はさにや置かぬ胸の一物、一々残らずサア／＼白状／＼」

と裾ばせ折つて詰めかくれば、さしも不敵の鉄山も、懷大事とうぢつく身構へ見て取る三平

「さてこそお身が懷中に」

と突き込む腕先もぎ放し、するりと抜けて切り付くる、傘をすぼめて丁ど請け、引けば開き、裾を払えばひらりとかはし、何れ劣らぬ早速の働き。空には雨

風ばら／＼／＼、ばつと燃え立つ炎の中、またもやお菊が声あり／＼『一つ二つ三つ』

「微塵になさん」

と切りかくるを、無刀であしらふ三平が、加勢は妻の怨念力、『四つ五つ六つ七つ』、なんなく付け入り鉄山が、ひばら脾腹をはつたと死活の当て身、『うん』とのつけに反りかへるを、『八つ九つ』、足げに蹴たおし大音声

「オ、悦べ女房十とおの都合はコレこゝに」

と鉄山が懷より皿取り出だし

「妻の敵を一時に思ひ知れや」

と突き込む刀、さし通されて七転八倒報ひは早き断末魔、心地よくこそ見えにけり。一間の内より巴之助立ち出で給ひ

「今に変はらぬ夫婦の忠節、いつの世にかは忘るべ

き、某再び世に出でなば、お菊が霊はこの姫路の十

二所権現かんじょうの内へ勸請せん」

と残る方なき仁愛の仰せに『はつ』とありがた涙、

今の世までも隠れなき少彦名の御社に、菊の宮とて

名に高く筆に写せし皿屋敷、古跡を残して立ち出づ

る。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。